

袋井地区中学校における

総合的な学習の時間の取組について

袋井市立周南中学校

教諭 増田 真也

## I はじめに

袋井市は、田畑や森林、メロンなどが身近にある自然豊かな地域であり、近年では若者の移住が進み、人口が増えている数少ない地域でもある。また、地域の方々も教育に協力的であり、エコパ（静岡県小笠山総合運動公園）での環境学習、袋井消防庁舎での防災学習、さわやかをはじめとした諸企業と連携したキャリア教育など、体験場所や専門的な知識を学ぶことができる機会が多い。そして、袋井市全体のテーマとして、「袋井市を笑顔のあふれる街にするために、市長と未来について語り合う場」を設定、未来の社会の主役である、小学生や中学生がアイディアを出し合い、考えや思いを共有できるよう、小学校や中学校で取組を実施している。

生徒への実態調査のために行ったアンケート結果からは、「お店や遊ぶ場所等はあるが、そこまでいく交通手段が少ないため、気軽に使用することができない。」「袋井市はもっと発展してほしい。しかし、その意見や思いの伝え方がわからない。」「外国の方が増えたため、避難場所への表示を増やす必要がある。」など、地域に対しての思いや改善してほしいと考えている生徒が多かった。また、授業で生徒の様子を見てみると、自分の考えを伝える方法や伝えようとする意欲が低く、学習したことを他の学習や毎日の生活で発揮しようという意識が低いこともわかっている。

袋井市の目指す子供像「夢を抱き、たくましく次の一步を踏み出す 15 歳」に迫るために、「目標設定・解決する能力」「考えや意見を発信する力」「社会へ貢献する方法を知る力」を伸ばしていきたいと考えた。そこで、袋井市の生活科・総合的な学習部の研修会において具体的な取組を企画し、計画的に進める学習が必要不可欠であると話し合い、本研究の発表に至った。

## II 研究実践

### (1) 浅羽中学校の取組について

重点目標は、地域社会とのつながりを意識し、住んでいる街に貢献する方法を考え、発信する力を伸ばす生徒の育成である。

1 年生では、「地域学習、身近な社会を知ろう」を重点目標とし、中学生の視点から、身近な地域を見ることが、地域にとって必要なことや自分にできることを検討する。

振り返り例

車や自転車が主として利用されており、交通網の充実、発展が必要だと思う。老人の事故も多いから、減らしたい。

公園はあるが、禁止されていることが多い。スポーツや目的に沿った施設が少なく、興味をもってもできない。

最近になって SNS で有名になったお店が増えた。もっと袋井市として有名になってほしい。HP にのせられるのかな。

2 年生では、「社会を体験しよう」を重点目標とし、地域で働くという視点から、どのような職業が住んでいる袋井市にあるのかを調べ、興味や関心をもった職業について調べる。10 月には、職場体験を行い、働く人の心や地域で働く人のものつ悩みや不安、課題を考える。社会貢献プロジェクトでは、社会人としてのマナーやあいさつの仕方など、最低限度の知識やマナーを身に付ける。

袋井市で作られている製品や作り方について見ることができた。しかし、製品は袋井市内や周辺市町までしか知られていないため、製品がなかなか売れていない。

飲食店で働く人が感染症の影響で減ってしまって、補助金だけでは、生活することができない。後継者不足に悩んでいる。

海に近い店舗では、地震に対して対策を練る必要がある。しかし、外国籍の従業員が避難するときの看板や説明がなく、企業として、困っているところがある。

3年生では、「社会に貢献できる大人になろう」を重点目標とし、2024年度は、「10年後も住み続けたい袋井市」を目標に、プロジェクト案をまとめた。現状から、10年間をかけて改善すべきことと10年後にも残したい、より広げていきたいことを考えた。

#### 実践による成果

中学生の視点で考えさせたことで、自分事として考え、自分たちの未来についてテーマにしたことで、興味関心が持続できた。

「自分たちの住む町にない魅力を持つ街」としたことで、京都・奈良に限らず、他の地域への関心を高まった。

対話を通した課題の設定をすることで、自分の考えを聞いてもらえたという経験から、より良い発表につなげようとする態度につながった。

#### (2) 周南中学校の取り組みについて

重点目標は、「持続可能な世界の作り手」を意識して何ができるかを模索し、人としての生き方や地域の未来を考えるである。義務教育終了後の将来について、3年間をかけて自己を見つめ、探究するとともに、「みんなの幸せ」を意識して取り組んでいる。

1年生では、「地域から学ぶ」をテーマに、探究学習基礎学習、UD(ユニバーサルデザイン)、地域の課題探究、世の中の職業への視野拡張、義務教育終了後の生活意識醸成を図る。

2年生では、「社会の課題を見つける」をテーマに、フィールドワーク、福祉や生活面での袋井市の状況把握、職業観を比較する未来授業、修学旅行事前学習を行う。

3年生では、「未来を考える」をテーマに、修学旅行、未来の袋井への提言、義務教育終了後の生活の検討を行う。

#### (3) 袋井中学校の取り組みについて

「地域に積極的に関わり、地域に貢献できる大人になる」を重点目標に、SDGsを軸として地域と関わる学習を進めている。

1年生のテーマは、「SDGs×袋井市」(課題発見・気づき)であり、袋井市内のSDGsを探す学習活動を行う。

2年生のテーマは、「SDGs×(地域の)職業・企業」(解決策・考え)であり、課題の解決策を考えたり、地域のよさをさらに発展させるための方策を考えたり、職業体験を行ったりする。

3年生のテーマは、「SDGs×地域貢献」(実践・行動する)であり、自分が地域の課題解決にどのように貢献できるかを考え、実際に自分自身が行動したり、課題の解決や改善のための提案をまとめたりしている。

#### （４）袋井南中学校の取り組みについて

「ウェルビーイング」誰もが幸せになることを目指して、主体的に考え行動することができる生徒を重点目標として、３年間 SDGs を軸とした学習を進める。

１年生のテーマは、防災学習を主とした地域探究であり、防災についてのクイズ作りを通して、これまでの日本の災害について知り、それをもとに、自分たちの家の防災対策を見直す。最終的には、問題点から防災グッズを考え、企業に提案し、商品化を目指す。

２年生のテーマは、職業学習を主とした職業探究であり、企業見学、職業調べ、職場体験を通して、自分の生き方や社会のあり方について考えを深め、最終的に、プレゼンを作成し、発表を、職場体験先の方にも聞いていただく。

３年生のテーマは、福祉学習を主とした福祉探究であり、福祉のお仕事セミナーや福祉調べ、福祉体験、特別支援学校との交流を通して、障がいのある人の生き方や社会のあり方について考えを深め、最終的には、プレゼンを作成し、発表は、社会福祉協議会の方にも聞いていただく。

### Ⅲ 浅羽中学校の実践における成果と課題

生徒が学習を進める中で、教師や保護者を含む大人との対話を取り入れた。日頃の生活で、調べた内容やまとめ方、現状などを自分の言葉で伝える機会は少なく、授業などでも大人との対話する機会はかなり少ない。そこで、探究的な学習につなげるためにも、大人との対話を取り入れた。その中ではっきりと得られた情報としては、次の通りである。

#### 【課題と感じる面】

- ・課題に対して、１つだけでなく、複数の視点を持つことができていない。
- ・袋井市の特産物について有名なものは知っているが、地元で作られているものや加工されているものについては、知識が少ない。
- ・今までに自分の意見を聞いてもらう機会が少ないため、課題を設定した理由や調べる内容が薄く、自分の言葉で説明できず、大人側からの質問に答えることができない。

#### 【効果的であった面】

- ・教師との対話を行ったことで、調べることが明確になり、効率よく調べ学習を進められた。
- ・目標とする内容だけでなく、違う視点から考えるきっかけとなり、調べ学習の幅が広がった。
- ・現在の袋井市がもつ良さだけでなく、今までに知らなかった特産品や生産物、歴史的文化財について知ることができた。
- ・教師と対話する中で、調べる内容が自分の目標とは違っていることがわかり、軌道修正することができた。

個人学習を中心に進めたことで、それぞれの学習を進めるスピードに合わせて声掛けをすることができた。そして、定期的にグループ学習を取り入れたことにより、自分が学習を進める上で必要な情報に対して、責任を持つことにつながった。

また、生徒の振り返りからわかったことがある。それは、「自分の意見や考えがあっても、意見の伝え方がわからない。」「子どもたちの学習に大人が関わることで、物事を違った視点で考える」ことである。小学校から、毎日の生活で気づいたことや発見したことを課題、目標としてきた。袋井市は、ICT 環境への移行を早くから進めてきており、小学校の国語や社会、総合的な学習の時間の授業で４００文字から

800文字程度のレポートを数回作ってきた。ロイロノートやパワーポイント等をはじめとした視覚的な情報機器の活用なども使用できるようになり、便利になっている現在であっても、子どもたちは、自分たちの発表に対して「自信」をもつことができていない。そのため、子どもが自信をもって発表（伝える）することができる姿を目標とすることで、9年間を見通して育てることができるのではないかと思う。

また、子どもの学習に大人が関わることで、新しい疑問やより深い考え方ができるようになるとわかった。子ども同士での考えは、中学生までの経験から話ができるため、大人（教師や地域住民、家族等）と関わることで、自分にはない視点で見ることができたり、自分の考えに疑問をもって質問、会話を進めたりすることで、より広い目で見ることにつながった。

#### IV まとめ

今まで、各学校で設定した課題に向けた目標や授業づくりを進めてきた。そのためか、同じ市内であっても、目標があいまいになってしまったり、子どもたちの実態に合っていない取組が多くなったりしていたことがわかった。袋井市の地区研修で毎年各校ごとの実践紹介を行っているが、総合の担当者は変わることが多く、研修成果の蓄積が難しいと感じられた。そのため、同じ市内中学校での情報の共有、市としての目標を設定していくことで、より探究的な学びにつながるのではないかと考え、取り組んだ。

また、世界的に見ても、日本の若者（小、中、高校生）が社会に関わる機会が少ないことがわかっている。生徒たちの意見からも、「自分たちの意見が取り入れられる可能性」を考えることで、より積極的に社会に関わりたい、貢献したいと感じるのではないかと考える。そこで、袋井市や浜松市で行っている「中学生未来会議」の形を今後も続けていく。または、中学生として市の職員と関わる場面を作っていくことで、子どもたちの意見を伝える場として子どもたちが自信をもって話そうとする機会を作っていくことが大切だと考える。

今後は、市内中学校との共有を進めるとともに、小学校とのつながりも考え、9年間を見通した話合いをしていき、子どもたちが主体的に社会に関わりたいと考えるよう、効果的な取り組みを研究していきたい。